

仙台湾のヒラメ稚魚成育場は維持されているか？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗田, 豊, 玉手, 剛, 岡崎, 雄二, 黒川 忠英, 坂見, 知子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2006368

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



東北水産研究レター No.23 (2012. 3)

仙台湾のヒラメ稚魚成育場は維持されているか？

常磐・仙台湾のヒラメは、5～9月に産卵します。卵から孵化した仔魚は1ヶ月弱の浮遊生活期を経て、全長1cm程度の稚魚となり、水深10m以浅の砂底に着底します。3月11日の震災で、仙台湾には高さ10m前後の大きな津波が押し寄せました。この大きな津波の影響で、海底の状態が変化し、ヒラメ稚魚が生息できる環境が破壊されてしまったことが危惧されました。そこで、仙台湾浅海域の砂底域の分布と餌の量、ヒラメ稚魚の分布と成長を調べました。

まず、ヒラメ稚魚が生息する水深10m付近の底質と餌を、仙台湾全域の18カ所で調べました。その結果、震災以前と同様に、仙台湾の西部の七北田川河口～阿武隈川河口は海底が砂地で、稚魚の餌となるアミ類が多く生息することが判りました（図1）。



図1. 調査地点と底質
沿岸側が水深10m、沖側が水深20m

そこで、次に、東北水産研究所が2002年以降継続的に調査を行っている名取川河口～仙台空港の水深6～15mの場所で、ヒラメ稚魚と餌の採集を、8～12月に定期的に行いました。

ヒラメ稚魚は非常に多く、過去10年で3番目に高い水準（図2）でした。胃の中を調べると、主食であるアミ類や魚のシラスをたくさん食べていました（図3）。また、全長の月変化から推定した成長速度は1.89mm/日となり、耳石を用いて推定した震災以前の成長速度と変わらず、非常に早いことがわかりました。また、主要な餌であるアミ類も安定して多く採集されました。

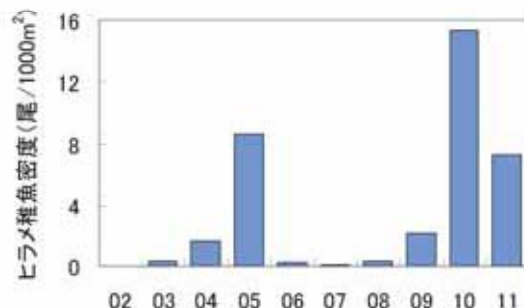


図2. 2002～2011年ヒラメ稚魚の密度

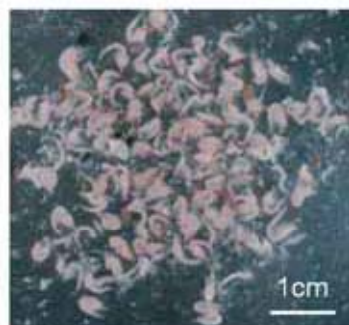


図3. 1個体の稚魚（10月30日採集、全長164mm）が食べていたアミ類

以上のことから、仙台湾西部海域は、震災前と変わらず、ヒラメ稚魚の良好な成育場であることが確認できました。

浅海域には、ヒラメ以外にも多くの魚が生息しています。今後も、ヒラメ稚魚以外の魚をふくめて、この海域の成育場としての質・量の変化と役割を、注意深くモニタリングしていきたいと考えています。

この調査に取り組んでいる

